して、既に生氣備はれり、動搖して早地上に出かゝりたるもあり、いまだ半ば竹にて半蟬に變じかゝりたるもあり、色々ありて其數百千に及べり、初は小僧奴僕なども珍らしがりしが、あまり多きゆゑ、後にはもてはやすともなく、住侍は生類を害せんことを憐れみ、又土に埋み蟬に化せしめられしとや、珍らしさに余も兎角して、二ツ三ツを求得て携へ歸れり、其中に背中より子生ひ出たるも有り、京に歸りて人に語るに、草の根の虫に變ずること多きもの也、竹の蟬に變ずるもある事なりといへり、誠に多は虫に成り、夏は草になるものも、本草などにも見えぬれば、是等も其類ひにてやあらん、

〔鳩巣文集一〕竹化石賦　并序

若水稻子之家有竹化石長二寸餘、濶半之、厚又半之、色如墨、有一節居中云、三年之前稻子請新井君美與余以求詩、且言曰、竹之化石自古有之、間於稗史小說見之、蓋竹之斷根漂流出沒於端沙之間、不知其幾百年、而日曝風乾受寒暑之變、則其化石者、時或有之、此亦天地間至難得者也、故人以爲溝中之斷、而余以爲天下之奇、雖千金不願易也、○略　下

〔東遊記五〕七不思議

一逆樣竹は、むかし親鸞上人此國○越後へ配流の時、携へ來り給ひし杖を、さかさまに地にさし、我說所の法世に弘らば、此杖の竹再び榮ゆべしといひ置給ひしに、其杖さかさまながらに枝葉しげり、其後其根に生ずる所の竹皆逆樣なりしとなり、今は其古跡のみ鳥屋野といふ所に殘れり、

〔視聽草五集九〕靈形竹子生、右根ゟ石蛇堀出候儀ニ付、申上候書付、

私御代官所武州足立郡舍人町之儀者、道尺ゟ赤山往來有之、同村地内右往來際ニ字二ツ橋と申所ニ、百姓嘉七瓦燒立候場所有之、右地内ニ壹反分程之藪有之候處、右藪角壹尺五六寸之所、壹寸廻り、長壹尺ゟ貳三尺位之竹の子、數七十本餘生立候を、右嘉七見候處、不殘先之處曲り有之、如何